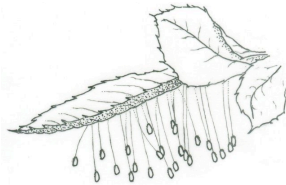


触れると壊れそう

1. クサカゲロウ

下図は、法華経で3000年に一度咲くといわれる『優曇華（うどんげ）の花』で、白い長さ1mmくらいのラグビーボール形のものに細い柄がついています。いろいろなものに付いていることがありますが、正体はクサカゲロウの卵です。



成虫は、体色が薄緑色で同色の透き通る翅を持ち、弱々しく飛ぶ体長2cmばかりの昆虫です。夜行性で、昼は葉裏に止まっていることが多く、側を通った時に飛び出します。幼虫が水生の蜉蝣（カゲロウ）のように弱々しく、緑色から”草”カゲロウと呼ばれるようですが、他の説もあります。英名のGreen lacewingも体色と翅の特徴からの命名です。打吹山で出会いやすいのは、顔に4個の黒点をもつヨツボシクサカゲロウです。



幼虫は、植物から吸汁するアブラムシを捕食します。体形はアリジゴク型で、ゴミやアブラムシの死骸を背中に乗せているものがあり、カムフラージュをしているのですが、脚や細い鎌状の大顎が見えたり、ゴミが動くことで見つけることができます。弱々しい成虫とは全く異なる肉食性の幼虫ですが、餌のおかげで益虫と呼ばれます。

2. キツネノハナガサ

カラカサタケの仲間、淡い黄色、薄い傘に放射状の条線とヒダで上面はまるで扇を広げたように見えます。何とも繊細な感じのするキノコです。地上に生え、傘の直径2~5cm、柄は長さ4~7cmでつばがあり根元は膨らんでいます。キツネ色を連想させる落ち葉



等に生える腐生菌で、公園ではサクラの根元、打吹山ではシイの林床が開けた落ち葉の多い場所にぽつりぽつりと見られ、周囲とコントラストがあるためよく目立ちます。食用価値はありませんが、取るよりは眺めたくなり、触るのがはばかられるキノコです。



熱帯地方を中心に分布するキノコですが、打吹山では最近よく目につくようになりました。これも温暖化の影響でしょうか。